ISSN 0288－1594

AV JOURNAL

1984年３月　第５号

〈音声実験室にて〉

目　次

シャンソンと私……第二部主事　松井　三郎… 2
「生兵法は大怪我のもと」……上野　義和… 4
ルーマニアの音楽－その２－……伊藤　太吾… 5
視聴覚教材解題－朝鮮語－……奥田　一廣… 7
《展望－これからの音声教育－》……堂裏　泰子… 8
視聴覚教育施設平面図・概要……11
テープライブラリー、ＬＬ自習室利用状況統計表
（1982年９月～1984年２月）……13
〈出版物案内〉編集後記……16

大阪外国語大学

シャンソンと私

第二部主事　松　井　三　郎

最近は日本ではシャンソンの人気がずいぶん下火になっているらしい。ＦＭ放送の番組を見て、あれだけ多くの番組の中で、定期的にシャンソンが流されているのは１週間通して70分程度に過ぎないことからもわかる。

私がフランス語を学び始めた昭和20年代後半にはシャンソンの人気はかなりのものだったように思う。

ティノ・ロッシ、シャルル・トレネ、イヴ・モンタン、エディト・ピアフ、イヴェト・ジロー、ジャクリーヌ・フランソワ、といった人たちが全盛の頃だった。

ラジオでは「歌うフランス語講座」があったし、『ふらんす』誌（白水社）では毎号シャンソンの譜と歌詞を載せていた。

私もそれらによって聞き、歌い、覚えた。「暗い日曜日」（ダミア）、「わが心はバオリン」（アンドレ・クラヴォフ、「詩人の魂」「ラ・メール」（シャルル・トレネ）「枯葉」（イヴ・モンタン）などである。

当時、録音機はすでに普及し始めていたが、学校に何台か置いている程度で、個人で持てるようなものではなかったから、シャンソンを聞き覚えるといっても、たまたま聞く機会を重ねて覚えて行くより仕方がない。自分で機会を作るにはレコードを持てばよいわけだが、それにはレコード・プレーヤーが要る。町にプレヤーは売ってはいたが、何しろ戦後の不自由時代の続きで、貧之学生には手が出ない。

家に父が若い頃使っていた大きな箱型の手廻しの「蓄音機」があった。ゼンマイが切れ、サウンド・ボックスが壊れたひどい代物だった。これを分解し、ゼンマイをつなぎ――どうやってつないだのか記憶が定かではないが、不自由時代のおかげでその程度の器用さは身につけていた――サウンド・ボックスはさすがに直すすべがなく、新しいのを買ってつけ替えた。これで何とか鳴るようになって、シャンソン・レコードをポツリ、ポツリと買い始めた。もちろんＳＰ盤で片面に一曲しかはいっていないものである。

家でフランス人が歌うのを、聞きたい時に聞けるのは感激であった。何度も何度も繰返し聞いた。重いサウンド・ボックスに鉄針をつけたやつで溝をこすって音を出す仕掛けだから、これを何度も繰返すと溝が擦り減るのが道理で、やがてひどい音しか出なくなる。今からすれば考えられないくらいお粗末なシャンソン鑑賞であった。

大学を卒業してからも何年かはこういう鑑賞を続けていた。「電蓄」を手に入れようと思えば手に入れられるようにはなっていたと思うが、無理をして買う気は起こらなかったし、やがてシャンソンに興味が薄れて行った。

それに伴って音を嫌うようになり、憎むようになって行った。ロックを代表とするような音楽にはなじめず、これをやたらと音量を上げて聞かないと気がすまないような風潮がいやだし、それに迷惑させられることが多くなって行ったせいもある。

２、３年前までは20年近くもシャンソンにほとんどそっぽを向いていた。その間にテープ・レコーダーを持ち、ステレオも置いたが、テープは芝居や朗読に限ったし、ステレオの利用者は専ら家内であった。

３年前だったか、家内がラジオ・カセッターを欲しがり、それの購入につき合わされた。と言っても、こちらにラジカセの知識があるわけがなく、その種の機械を初めていくらかの関心をもって見、いいかげんなことを言ってその中の１つをすすめただけのことである。ところが、その機械をいじっているうちに自分も欲しくなってきた。

小型のものを手に入れた。ＦＭ放送番組を見て、わずかなシャンソン放送をキャッチし、録音を始めた。ボツボツと集まってきた。解説者のおしゃべりは余分だから、それをカットしながらの録音は骨が折れ、ときに失敗する。番組をまるまる録音しておいて、後で編集することを思いつく。それにはもう

１台機械が必要だ。こっそり手に入れた。

これでシャンソンを集めていった。何しろ20年近くも離れていたのだから知らない名前が多い。昔なじんだものとはおよそ異質な歌もある。それでも、名曲とされているものはいつまでも生き続けているわけで、「ラ・メール」「枯葉」などがそれぞれの季節に何度かずつ流れてきてなつかしい思いをする。

私がシャンソンを聞くのは、もちろんその曲にも興味があるためだが、それ以上に大きな関心がパロールにある。シャンソンの魅力はそこにこそあると思っている。昔聞いた蓄音機のものとは比較にならない良質の音がそこにあった。モノラルで充分だと思っていた。

ところが、１年もたたないうちにステレオのラジカセを買う気になっていた。ステレオでシャンソンを初めて聞いた。ヘッドホーンで聞くその音の魅力はさすがに私にでもはっきりわかった。編集するためにもう１台ステレオのが必要になる。もう１台買った。やがてまた欲が出て、研究室にも１台欲しいと思う。また１台買った。家では外出中に、学校では授業中にも番組をキャッチ出来るようにセルフ・タイマーをそれぞれつけた。

こうして、土曜日の夕刊にはさまっているＦＭウイクリーで番組をチェックしておいて、たいていはうまくキャッチし、編集してストックする作業を続けている。

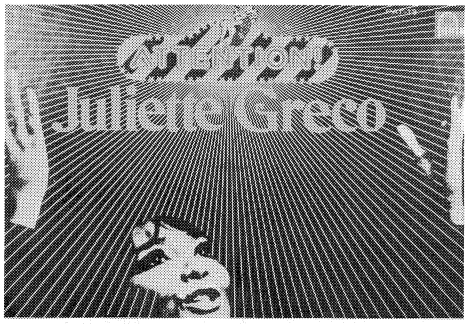
現在のような多少忙しい生活をしていても、編集する時間くらいは充分見出せる。それほどシャンソンの番組は少ない。これがアメリカン・ポップスだったら大変だろう。

１年前だったか、中学生の息子が、「英語の勉強のために」ラジカセを欲しいと言い出し、不要になっているモノラルを与えた。ほどなく息子はビートルズに凝り出した。モノラルではもの足らんと言い出し、ステレオを与えなければならないはめになった。娘も欲しいと言い、これには「あかん」と言うわけに行かない。

そこで、私はステレオＷカセッターを買った。実はしばらく前からこれが欲しくてたまらなくなっていたのだ。今はこの機械で機嫌よく録音し、編集の便利さに満足している。かくてわが家はラジカセだらけになっているが、それぞれヘッドホーンを例用させ、人に音で迷惑をかけないことを鉄則としているから、今のところ家の中で騒々しい音楽に悩まされることはない。

それはともかく、こうしてわずかなシャンソン番組から捨い集めていても、始めてから現在までで２年半ほどにしかならないのに、録音したカセットはすでに200本近くにのぼっている。機械がころころ入れ替り、録音状態が違っているので、ダブルのをいとわずに採っているからテープの数は多いが、曲の数では2000曲くらいだろうか。世にあるシャンソン歌手の数は多く、曲の数となると無数に近いだろうが、幸い日本では選りすぐりを流してくれているようだから、これくらいで代表的な、あるいはヒットした曲の半分程度は含まれているのではないかと思っている。

数が多くなると目録がなければ利用価値が小さい。それには早くから気づいて、初期でインデクスを作ることを考え、実行に移した。夏休みの一日を利用して、それまでのものを整理した。それ以後は編集する度にインデクスに書き込む作業もやっている。カセット順のカード、曲名の50音順カード、歌手名カードがそろっていて、即座にリクエストに応じられる手筈ができている。



一口にシャンソンといっても、これがまたタイプがさまざまで、新しいものにはロック調のものもある。こういうのにはやはりなじめない。気に入りのものといえば、どうしてもかつてなじんだ昔風のものになる。「桜んぼの実る頃」「枯葉」風のがいい。歌手では、男性だとシャルル・トレネ、イヴ・モンタン、女性ではジャクリーヌ・フランソワ、ジュリエト・グレコのような昔なじみのがいい。

それでも、シャンソンとの新しい付合いでいろいろ新しい魅力を発見した。20年も近くも離れていたために、その存在を知らなかった——アダモさえも知らなかったのだ——シンガーソング・ライターたち、大御所のレオ・フェレ、惜しまれながらガンで逝ったジャク・ブレルほか、セルジュ・ゲンズブール、セルジュ・レジャニ、コラ・ヴォケール、バルバラ等の魅力、30～40歳代のミシェル・デルペシュ、イヴ・デュテイユ、エンリコ・マシアス、セルジュ・ラマ、ミシェル・サルドゥ、女性で、フランソワーズ・アルディ、ミレーユ・マチウ、等々の魅力も知った。シルヴィ・ヴァルタンは若い頃に「アイドルを探せ」で日本でも大変な人気であったことは知っていたが、その後のことを全く知らなかった。私のコレクションに彼女のものが30曲以上集まっている。中年女性歌手の得難い魅力を感じる。

かつて親しんだジルベール・ベコーが、ずっと活躍を続け、56歳になる今も新曲を発表していること、昨年もオランピア劇場でリサイタルをして人気があったことも知った。イヴ・モンタンの話題のカム・バックはばっちりカセットに収めた。

今や私はかなりの通になりつつある。

ここ2年間は主事職のために暇を見つけ難く、せっかく持っているコレクションを充分に利用できないのが残念だが、間もなく任期も終わることで、4月からは十二分に活用できるだろう。2、3年先には相当な通になっているかも知れない。

（昭和59年2月26日）

「生兵法は大怪我のもと」

英語学科　上　野　義　和

今学期の初め、ふとＬＬ資料室に立ち寄った時のこと。偶々手にとったものが、「アメリカのうた」というカセットテープ付きの歌集であった。目次を見ていて思わず目をむいた。“When You and I Were Young, Maggie”（以下 Maggie と略）がアメリカ民謡として収められているではないか。アイルランド人の世界的声楽家である、あの John　mcCormack が朗々と歌いあげている。そして又、何よりもあの哀愁を帯びたメロディーはまさしくアイルランドそのものといった感じのあの歌が！　中学生の頃初めて耳にして以来、アイルランド民謡と一途に思いこみ愛唱してきただけにしばし茫然……。いや、こんなはずはない、きっと何かの間違いだ、と思い直してあれこれ文献をあさってみたが、一冊として‘Maggie’をアイルランド産と記したものはなかった。

何故このような間違い（というより早合点か？）が生じたのか。何となく歌詩を覚えはしたが、その正しい意味を知る努力を怠ったためではないか、と思い、遅ればせ乍らその作業を始めた。‘Maggie’の出だしは次のようになっている。

I wandered today to the hill, maggie
To watch the scene below
The creek and the creaking old mill, maggie
（下線部は版により old rusty）

問題は三行目の 'creek' だ。この語は「小川」と「(海・湾の)入江」の両義を持つが、ここでは後続の'mill'(水車小屋)との結びつきからいって「小川」の意でなければならない。実はこの「小川」こそが米語における意味であって、「入り江」は英国に限られる。本来、「入り江」が 'creek' の原義であり今日の英国でもその意で使われるが、新大陸に移住した英国人達は新天地での地理的実情に合わせて、「小川・支流」の意で用いるようになった。このように古くから用いてきた語を新しい意味に転用することは米語の特徴の一つで、以下

	(英国)	(米国)
corn	小麦	トウモロコシ
lumber	がらくた	材木
alley	小径	裏通り
block	塊り	街区
beat	(くり返し)打つ	(警官などの)パトロール区域
barn	納屋	馬小屋

など、又、米国で 'shop' と 'store' に明確な意味の区別があるのも同様の経過をたどったためとされる。

こうなると Maggie' がアメリカ産の歌であることにはもはや何の疑いもない。私はこれでよいが私を通じてこの歌を知った人が少なからずいる。しかもこの歌がアイルランド産であるという間違った知識も一緒に。その中には私の早合点を詫びることがどうしてもできない人が一人いる。私の恩師の一人だ。酔うと必ずこの歌を歌い、「アイルランド民謡は本当にいいな」が口癖だった。その先生が昨年亡くなられた。'A little learning is a daugerous thing'.という A. Pope の言葉はいつの世でも正しい。体験して初めて格言の正しさを知るのは辛いことだが、同じ Pope の格言 To err is human, to forgive divine' (誤るは人の常、許すは神業) に少しは救われる気がする。合掌

ルーマニアの音楽 —その2—

イスパニア語学科　伊　藤　太　吾

ある統計によると、日本人に最も好まれている西洋のクラシック音楽は、バイオリンコンチェルトのツィゴイネルワイゼンであるという。これは、ハンガリー音楽の特徴の1つであるジプシー風メロディーを手本にスペインのサラサーテが作曲したものである。曲目の「ツィゴイネル」とは「ジプシー風の」というドイツ語である。

スペインのジプシーはフラメンコを生んだが、ハンガリーのジプシーは田園情緒豊かな曲を沢山生んでいる。スペインは、観光案内などには「太陽と情熱」とあり、フラメンコはそれと同意義のように思われているが、本質は決してそうではなく、苦悩・悲愴など人間の内面を表現しているものがフラメンコである。

ハンガリーには流浪の民ジプシーの嘆きがベースになった名曲が数多く、日本人の中に数多くのファンがいるが、それはハンガリー人の祖先が東洋系のフン族であるということによる無意識裡の一体感にもまして、芸術のための技巧にはしり過ぎることのない方法での民衆の純朴な情感をせつせつと謳っているからであろうし、また、日本人がクラシック音楽の明かるさよりも陰鬱さを、豊穣よりも貧しさを好み、「貧窮」、「苦悩」、「孤独」、「ゆううつ」といった言葉を好きだからであろう。

私は少年時代に初めてツィゴイネルワイゼンを聴いた時の何とも表現のしようのない興奮をいまだに憶えているが、不惑の年を迎えた今日、同様にふしぎにも切ない興奮をおぼえるのはルーマニアの「バイオリンとピアノのためのバラーダ」という曲である。「バラーダ」とはルーマニア語で、一般的には「叙

事詩」という意味である。この「バラーダ」の作者はルーマニアのチプリアン・ポルンベスクという人である。その「バラーダ」は、ツィゴイネルワイゼン同様、バイオリンコンチェルトであり、同様にハンガリーのジプシーの影響を受けたものであり、優劣を決めがたい名曲である。早くから日本に紹介されていれば、イヴァノヴィッチの「ドナウ河のさざ波」同様、日本人の心をなぐさめ続けてくれたに違いない。

作曲家のポルンベスク（1853－1883）が昨年6月6日に100年忌を迎えたのを機会に、その生涯をたどってみたい。ルーマニア狂詩曲のエネスク同様に、天才の生涯は短かかった。代表作のバラーダが我々の心を打つのは、「私が常に師事してきた作曲家は誰かと訊ねられたら、それはルーマニア人自身であると私は答える」という彼の信念と無縁ではない。これは何も大衆におもねる発言ではなく、彼自身の作曲家としての活動から出た、嘘・偽りのない発言であり、数多くの機会に表明されている事実である。幼少の頃から地方の民謡を理解し、ショパンの弟子であり、レンベルグの音楽院長であったカロル・ミクリに音楽理論とピアノのレッスンを受けたのは6歳の時からであった。父親のイラクリエ・ポルンベスクは一流の学者・詩人（作詩家）であったが、チプリアンは当然父親の音楽的才能を受け継ぎ、影響を受けた。というのは、少年の頃から楽譜を読むだけでなく、地方の民謡を収集・研究するという、いわゆるフィールドワークをも行っていた。当然、自然を愛するやさしい心の持ち主の少年に育つわけである。

スチァバの高等学校在学中にオーケストラ、コーラスグループ、クァルテット、クインテットなどを編成し、チェルナウツィ大学哲学部の学生の時に、市で最もすぐれた合唱団と室内楽団を編成する程に、若年にして彼の音楽的才能は開花した。彼自身は、ピアノ・バイオリン・チェロなどの楽器を演奏し、22歳の1875年にはクインテットの作品を2曲処女発表している。ウィーンで音楽と哲学の勉強を続けている間、在ウィーンルーマニア人学生達が構成する団体から、作曲家・指揮者・詩人として扱われており、故国はクルージュの学生団体から4本のコーラス曲の作曲の依頼を受ける程、当時の新進気鋭の作曲家の1人と見做されていたわけである。それを契機に、彼は学生用の歌曲の作曲に情熱を傾けるようになり、1880年には自作の学生歌集が出版された。それは、かつて類を見ないコーラス曲集として関係者の注目を集めた。約20曲から成る歌集は、今日も多くのコンサートで、人気の的である。それらの中の1曲、「三色の歌」は、今日ルーマニアの国歌となっていることからも、その人気の程が分かる。

ポルンベスクの作品の特徴は、新鮮さ、誰にもとっつきやすく、親しみやすいという近親感、メロディーが傑出していて、コーラスのハーモニーも明解であり、しかも、詩の内容が極めて愛国的であるという点にあろう。

前述の「バラーダ」(1880年)は、数世紀にわたるトルコの支配による民衆の苦しみをせつせつと謳い、同時にほのみえる希望に胸をふくらます哀歌であり、リリシズムの最高傑作の1つではなかろうか。バラーダの底を流れるのは、ドイナという哀調をおびたルーマニア民謡であることに異論はないが、それにジプシー風メロディーを加味して作品を不朽の名作たらしめている。

ポルンベスクはまた、1882年にルーマニアで初めてのオペレッタの作曲もしているが、いつの場合も、幼少の頃から収集・研究し続けてきた数々の民謡のメロディーを挿入・応用することを忘れなかった民族派の音楽家であった。絶筆は、1883年5月の「過ぎ去りし日々」という哀歌であるが、過去を歌うにはあまりにも短かい30年の天才の生涯であった。

ブカレスト市民は、マドリッド市民同様に映画が好きで、今（84年2月下旬）スター・ウォーズをはじめとするアメリカ・フランス・ソ連のものが上映されている。そして、時々日本映画も上映されることもある。しかし、ブカレストの冬のシーズンは、何をいってもオペラである。昨日1週間遅れで手元にとどいた「週刊首都文化誌」によると、今週のオペラは、リゴレット、ドン・キホーテ、椿姫、セビリアの理髪師などである。日本でオペラのアリアを仕事の最中に口ずさむ人はめったにいないが、ヨーロッパの人達の中にはよくみかけることである。ルーマニアでも決して例外ではないが、そういった中でも、バラーダの作曲者ポルンベスクの作品が100年忌を境にして口ずさまれているというニュースがとどいている昨今である。

視聴覚教材解題—朝鮮語—

朝鮮語学科非常勤講師　奥田一廣

1．自習用教材と南北の相異

語学の練習に自習は欠かせないものであり、native speakerとの接触によって、実際に運用能力が向上することは言うまでもない。韓国からは留学生が来るし、大阪に在日朝鮮人の一世が何万人と居ると言っても、その人たちと逢う時間や場所・費用の心配も要るものである。また会いかたや練習のしかたに特別な配慮が要る。そして何よりも、会って話そうとするには、どうしても恥ずかしさが伴なう学習者も多いのも現実である。恥ずかしさは、けっして語学の向上のためにはならない。そこで、それを克服するまでの一つの段階としても、視聴覚教材が、朝鮮語においても、本のみによる学習書よりも、人にすすめられるわけである。

今回は、市販のカセットテープ付き教材の中から、最近出版された特色ある教材について紹介したい。朝鮮は事実上、南北に分断されてはいるが、そこで使用されている言語は同じ朝鮮語である。ところが、それぞれの言語政策等により、若干の相異が生じている。この相異について比較的詳細に解説し、かつ、題材や例文にもその相異が分るように配慮された教材が、ここで紹介する２つの教材である。

2．教材紹介

①岩波書店「朝鮮語入門」塚本　勲（1983）

②白水社「朝鮮語の入門」菅野裕臣（1981）

〈朝鮮語入門〉は、最初から視聴覚教材をめざして作られた教材である。このことは、いわゆるテープ別売ではなく、テープと本とともに購入することからも分る。

構成は、第１部文法篇、第２部講読篇から成る。第１部は62課より成り、各課は、例文・註・発音と逐語訳・文法解説・規則・簡単な練習・補註・練習問題・簡単な練習の解答より成っている。そして、およそ20課ごとにまとめ、試験がついている。

語学的訓練をめざす入門書では、初めのほうに文字と発音がまとめてあり、まず発音を修得してから文型の基礎に入っていくのが通例であった。この教材では、第２課が文字、ひきつづき第３課・第４課で最低限度の発音を示し、ここで第５課朝鮮語の輪郭で文型の構造を分りやすく解説した後、第６課から文型練習に入る。そして、第23課と第61課に、発音(4)、(5)として、とびとびに発音練習が有る。朝鮮語の発音は、特に子音（終声＝パッチム）が難かしいが、それが出来ないから、と、基本文型に入らないまま、学習を中断する人が多いことを思うと、秀れた配列である。なお、発音(4)、(5)でやる難かしい発音は、それまでの課に出ないよう配慮されている。

録音は、同じ例文を、朝鮮語－日本語－朝鮮語、と朝鮮語が２回ずつ入っていて、本文を見なくても日本語で意味を確かめながら自習できる。

本文中の解説は、本としては丁寧すぎるほどで、講義を髣髴させる。第一部を終えれば辞書を用いて文献を読みこなすことができる。第二部は、実際の文章を読むための入門編と言える。

〈朝鮮語の入門〉は、会話を中心とする用例を用いながら朝鮮語の文法の整理と練習ができるよう配慮されている。テープは60分２巻から成るが、そのうち発音の練習に45分、実に全体の三分の一が費やされている。最低限の例文と簡単な文法を学習しながら発音をすべて翌得した後、文法の理解へと進むよう配列されている。

構成は、Ⅰ文字と発音、Ⅱ例文と解説、Ⅲよみもの１、Ⅳよみもの２から成る。Ⅰは51の項目より成り、各項目の用例すべてが録音され、文字の発音、単語の発音・文節の発音・文の発音の順に本文を見ながら練習できるようになっている。Ⅱは35課より成るが、大きく８つのまとまりを成し、各まとまりの最後に文法の整理と練習が付いている。ここで、話しことばで多く用いられる文法的な形を中心に現代の書きことばのかなりの部分を読みうるよう文法

的な形が選ばれている。Ⅲはその復習。ここまでが録音されている。Ⅳは古い正書法による例。

この本で朝鮮語を自習するには、用言の種々の形を作るための「語基」という概念を理解しなければならない。第Ⅰ語基は言わゆる語幹、第Ⅱ語基は終声（パッチム）の有無、第Ⅲ語基は連用形と理解すればよい。

発音の練習と、話しことばの練習に適した教材ではあるが、多くのものが凝縮されているせいか、必ずしもやさしいとは言えない。初級をひととおりやった人に適すると思われる。

《展 望 —これからの音声教育—》

大学院日本語学専攻　堂 裏 泰 子

外国語を学ぶ時に母国語にない音声が存在すると、その音を聞き取り、発音ができるようになるまでたいへんな努力を要することがままある。また、同じ音声記号〔t〕で表わされる音声でも、ある言語では無気、ある言語では有気で、その差が言語学的に重要な意味を持つこともあり外国語の聞き取りや発音をより困難なものにしている。外国語の音声教育に関しては以前から多くの先達らによって様々のことが言及されており、教育法も多様化している。しかし、どのような場合でも音声そのものの分析をなくして有効な教育法は語れない。昔は音韻的な説明やおおまかな調音面の説明だけで満足せねばならない状態だったが、種々の音声実験装置の発達によって音響面や知覚面の研究も今や日進月歩の勢いであり、それに基づく音声教育も大いに期待できる状況にある。

『エレクトロパラトグラフによる構音訓練法』（柴田貞雄、井野朝二、山下真司著、リオン株式会社）という本が1979年に執筆された。これは構音障害者に構音訓練をするために考え出されたメソッドを詳しく紹介したもので、その訓練にエレクトロパラトグラフという装置を用いることを特徴としている。この装置は、口の中に電気仕掛けの人工口蓋をはめ、その人工口蓋に構音者の舌が接触すると接触した部分が電光掲示板に光点となって示される仕組みになっている。構音障害者はこの装置を用いることにより自分自身の構音状態を正常者の構音状態と比較しながら改善してゆくことができるのである。

このメソッドはこれからの音声教育を方向づけてゆく上で画期的なものと言えよう。さらに研究と改良が加われば、母国語の構音障害者はもちろん、広く外国語音声教育にも応用できる道が開けている。

そこで、今までの記述中心、物真似中心の音声教育から、より科学的、より効果的な音声教育へと、これからの展望を述べてみたい。

1．個別言語における音声学的研究の充実と言語間比較の充実及び音声教育への応用

外国語音声教育にあって常に強調され続けているのが母国語と外国語との比較である。そこで今、日本語を母国語とした場合のことを考えてみることにしよう。日本語の場合、音韻的研究は充実しているが音声学的研究はまだそれほど高い水準には到達していない。将来は特に音声分析・合成機器を用いた音声研究が期待される。また対象となる外国語に関しては様々な段階が考えられる。英語を筆頭とする主流派言語は比較的研究も進んでいるが、非主流派言語は皆無に等しい場合もありその差が激しい。これら非主流派言語に関してはこれからの精力的な研究が望まれる。

教育的見地からなされる言語間比較といったものは個別言語における音声学的研究の充実が土台となるが、この方面の研究はまだまだ長い道のりを歩まねばならないだろう。しかし、科学技術の発達により音声研究がどんどんと進歩し続けている現在、将来の見通しは決して暗くはない。

ちょっとした例を示そう。

私は以前タイ人に日本語を教える機会があり、その際発音矯正にずい分てこずった記憶がある。問題は破擦音と摩擦音であった。スとツ、シャとチャ等の区別ができないのである。タイ語には〔ts〕、〔ʃ〕

の発音が存在しないからなのか。疑問はそのまま残っていた。ところが、タイ語音声をスペクトログラフで分析しているうちに、タイ語の音素／C^h／には〔tʃ〕、〔ʃ〕２つの異音が存在することが確認された。この異音には個人差があり、また、１人のインフォーマントであっても、環境によって〔tʃ〕と発音されたり〔ʃ〕と発音されたりしていることがわかった。（資料１参照）この結果から―タイ人にとって摩擦に先行する破裂音があってもなくてもかまわないということが、スとツ、シャとチャ等の区別を困難なものにしている―と推察できる。反対に日本人はこの破裂音の有無に対してたいへん敏感に反応する。この関係をわかりやすくまとめると表１のようになり、タイ人に対する日本語音声教育の問題点がより明確になる。

（表１）

日本人の発音	タイ人の聴取	タイ人の発音		日本人の聴取	正誤
①チャ〔tʃa〕	タイ語音素 /C^h/で とらえる	/C^h/	〔tʃa〕	チャ	正
			〔ʃa〕	シャ	誤
②シャ〔ʃa〕			〔tʃa〕	チャ	誤
			〔ʃa〕	シャ	正

現在、音声研究は純粋に音声研究のためになされている場合が多いように思うが、研究の成果を実践的に教育の場へと応用してゆくこともこれからの音声教育を考えてゆく上で大きな課題となる。将来、この方面の研究が今まで以上に大きな地位を占めるようになることは確実であろう。

２．記述からビジュアル・メソッドへ

現在は音声教育＝L.L.と考えられるまでにL.L.教育が普及している。確かに教育的価値は高く、個人の言語能力を開発する上で大きな影響力を持つ。しかし、こと発音矯正に関して言えば、その有効性にも限りがある。L.L.では自分自身の発音とネイティブの発音を比較することによって正しい音声の習得をねらっている。しかし、その比較は発音者自身がするのであるから主観の域をなかなか脱しきれない。先ほどのタイ人の例のように、正しい知覚様式が獲得されないうちはネイティブとの比較もほとんど意味がない。将来、このような問題をどう解決してゆけばよいのだろうか。考えられうる１つの方法は、主観の枠を排除し、客観的にネイティブと自己との比較がおこなえるようにすることである。現在でもオシロスコープやエレクトロパラトグラフ等の音声実験装置が存在するが、さらに改良が加わりコストダウンすればL.L.装置との併置も可能になる。また新しいタイプの音声実験装置の開発も期待できる。そうなれば聴覚・視覚両方からの発音矯正が実現されるようになる。この方法を用いれば目標に到達するまでのプロセスをも客観的に把握することが可能であり、それゆえ到達速度も現在よりはかなり速くなることが見込まれる。

３．知覚面における音声教育の重視

自国の言語音の中に〔ts〕という音声を持たないタイ人にとって日本語の〔ts〕、〔s〕の聴取・発音の区別が容易でないことは先にも触れたが、正しい発音を促すためには正しい知覚を持つことが最も重要な課題と言える。正しい知覚―この場合に限れば、それは日本人が持っている〔ts〕、〔s〕に関する知覚上の弁別機能を獲得することに他ならない。つまり、摩擦に先行する破裂音にタイ人の耳が反応できるようになる、ということである。この例は、〔s〕音がタイ語に存在するのでまだ比較的負担の少ない方である。〔ts〕、〔z〕の区別になると、これは両方ともタイ語音声に存在しない音声であり、この２つを弁別するためにはまったく新しい知覚上の弁別機能を創造していかなくてはならない。現在の時点では、この弁別機能が容易には獲得できずタイ人の日本語初級学習者はス・ズ・ツ等の区別に四苦八苦している状態である。

聴取ドリルをくり返し、慣れでもってこれを解決しようとするのが現段階であるが、将来はこの知覚面での音声教育をもっと刷新できるのではないか、というのが私の意見である。

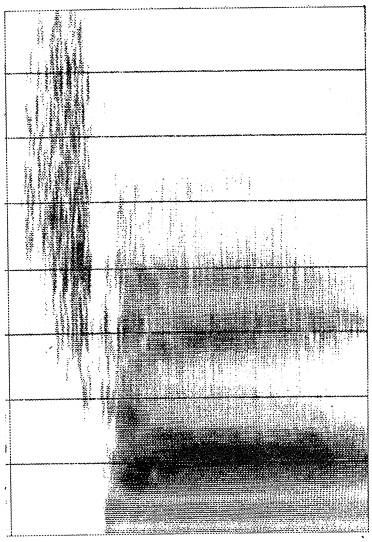
音声合成装置―これはコンピューターによって人工音声を作成する機器であり、近年音声研究に大きな役割を果たしているものであるが、利用いかんによっては教育面、特に上のようなケースにおいてたいへん有益であると考えられる。そのためにはまず、音声の知覚上での弁別機能がどのようなものであるかを研究する必要がある。それがわかれば自由自在にコントロールできる合成音声を刺激音として大脳に与えることにより、それに対する人間の知覚反応を新たに創り出したり弱化したりすることができる。

つまり、人間の持つ聴取能力をあらかじめプログラムされた刺激音で根本的に開発するのである。この方面の研究が進めば、音声教育は今までとは比較にならないほどダイナミックな様相を呈することになるだろう。

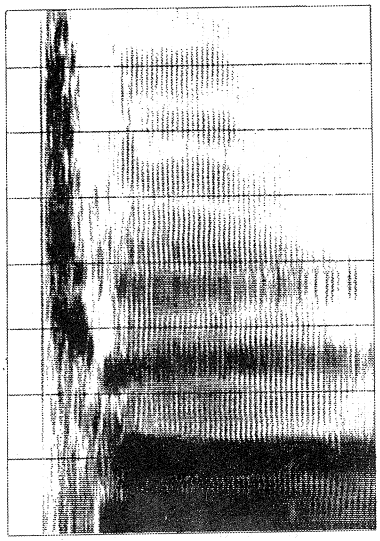
4．個人別音声教育、難度順音声教育

教育の場における有効性を追求すると、今までの集団一勢音声教育から個人別音声教育の方向へと移行してゆくことが望ましい。コンピューターを駆使した個人別音声教育のプログラムを利用すれば1人の教師が多数の学生を個人別に指導することも可能である。また、やさしいものからむずかしいものへと教育内容を難度順に体系的に積みあげてゆくプログラミングも今後の大切な課題であると言えよう。

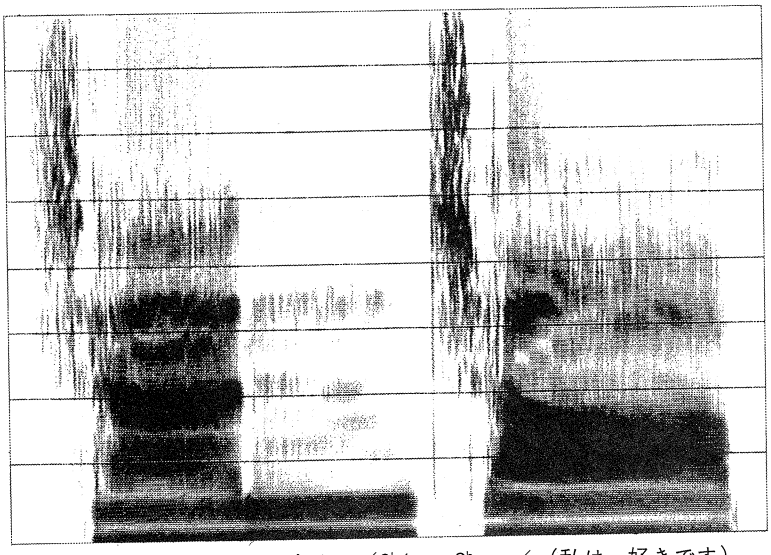
今まで述べてきたことはそれぞれが独立した有効性を持つものだと思うが、これらすべての内容が体系的に組み合わされた時はじめて音声教育の最大の局面を迎えることになるだろう。



タイ人インフォーマントA　／Cʰ／の発音
（破裂音なし）



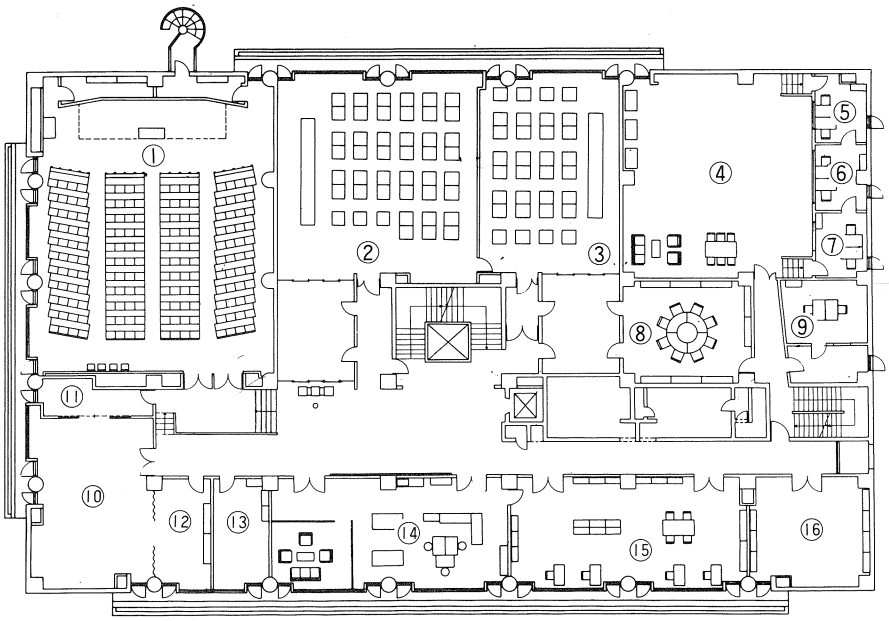
タイ人インフォーマントB　／Cʰ／の発音
（破裂音あり）



タイ人インフォーマントA　／Cʰán　Cʰɔɔp／（私は、好きです）
（前者 破裂音なし、 後者 破裂音あり）

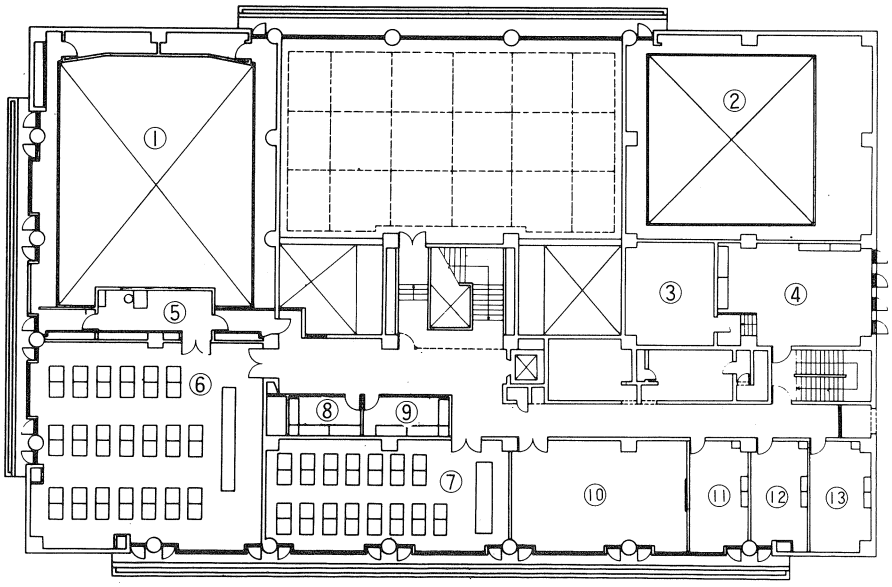
視聴覚教育施設平面図

4階



①視聴覚教室
②4-Ⅰ L.L教室
③4-Ⅱ L.L教室
④スタジオ
⑤編集室
⑥調整室
⑦企画室
⑧ビデオルーム
⑨録音室
⑩デシジョンルーム
⑪同時通訳室
⑫モニター・資料室
⑬資料整理室
⑭事務室
⑮テープライブラリー
⑯コンピューター室

5階



①視聴覚教室吹抜
②スタジオ吹抜
③無響室
④音声実験室
⑤モニター室
⑥5-Ⅰ L.L教室
⑦5-Ⅱ L.L教室
⑧海外放送受信室
⑨準備室
⑩L.L.自習室
⑪教材作成室Ⅰ
⑫教材作成室Ⅱ
⑬教材作成室Ⅲ

施設の概要

階数	室名	数量	面積	設備名	使用目的
4	L.L.教室 (1)	45ブース	132.5m²	各ブースカラーテレビ付 教材提示装置、マイコンアナライザー、全リモコンマスターコンソール	各語学科L.L. 授業で使用
	L.L.教室 (2)	32ブース	100.5m²	各ブースカラーテレビ付 教材提示装置、リスポンス・アナライザー、全リモコンマスターコンソール	各語学科L.L. 授業で使用
	視聴覚教室	176席	233 m²	電動スクリーン・カーテン、リモコン、マイク、大型スピーカー、	視聴覚授業、学会、映画会、コンサート等に使用
	デシジョンルーム	21席	62.5m²	会議ユニット、送信機、受信機	小国際会議場として使用
	同時通訳室	5席	12m²	同時通訳ユニット、録音装置	同時通訳演練のため英語学科授業他研究会に使用
	テープライブラリー室	24席	77.5m²	所蔵テープ、レコード16,000点 (教材自動送出装置 4席 リスニング ブース 4席 L.L.自習ブース 16席)	学生の自習用のため使用
	録音室(アナウンスルーム・制御室)		28m²	円盤再生機、高性能録音機、マイクミキサー	Native Speakerの録音のため使用
	スタジオ		121m²	ビデオ撮影機、編集機、テレシネ装置、照明装置	独自教材の開発、映像音声、収録のため使用
	企画室		11.5m²		
	調整室		12m²		
	編集室		11.5m²		
	ビデオルーム	8席 (補助7席)	39m²	ビデオコーダー、テレビ (Umatic, VHS, β型)	独自教材及びビデオ教材の映写室
	コンピューター室		39m²		
	事務室		77.5m²		
	資料整理室		19.5m²		
	モニター室		19.5m²		
5	L.L.教室 (3)	44ブース	155.5m²	各ブースカラーテレビ付 教材提示装置、マイコンアナライザー、全リモコンマスターコンソール	各語学科L.L.授業及び視聴覚授業で使用
	L.L.教室 (4)	32ブース	77.5m²	オープンテレコ、OHP	各語学科L.L.授業で使用
	L.L. 自習室	17席 (25名)	58m²	ビデオコーダー、カセットコーダー	録音ビデオ教材の貸出によって学生が自習する室
	映写モニター室		20m²	オーディオ装置、マイクミキサー	
	音声実験室		48.5m²	サウンドスペクトログラフ、ピジピッチ、オシロスコープ他各種音声分析装置	言語の性質を解明するためまざりもののない音声を収録、分析するため使用
	無響室		29m²		
	教材作成室	3室	58.5m²	テープレコーダー、カセットコーダー、パソコン、個別学習装置	教材の編集（音声）のために使用
	海外放送受信室		11m²	受信機、テープレコーダー	海外放送を受信、録音
	準備室		11m²		

テープ・ライブラリー、ＬＬ自習室利用状況統計表

①テープ利用回数　“82.9月～“84.2月

（言語・音楽）

総テープ数　6375本（語学・音楽 5888本、ヴィデオ　327本、雑誌 160本）
総利用回数 10244回（語学・音楽 7070回、ヴィデオ 2274回、雑誌 900回）

・（　）内の数は順位をあらわす

	分類（各テープ総数）	総利用回数	1　（各利用回数）	2　（各利用回数）	3　（各利用回数）	4　（各利用回数）	5　（各利用回数）
1	英　語（1412）	1500	英検１級カセットブック (141)	The New Intensive Course in English Advanced Part1 (84)	Linguaphone Advanced American English Course (78)	Linguaphone American English Intermediate Course米語中級コース (71)	The New Intensive Course In English Advanced Part2 (67)
2	フランス語（712）	1171	Basic Spoken French Elementary Course (785)	Basic Spoken French Beginner's Course (230)	La France en Direct 1 (134)	Intensive Spoken French (84)	La France en Direct 2 (73)
3	日　本　語（712）	1157	Japanese For Today (778)	An Introduction to Modern Japanese (97)	Intersive Course in Japanese Elementary (62)	Intensive Course in Japanese Intermediate (56)	Japansse For Beginners (37)
4	ロ シ ア 語（454）	466	Говорим по-русски (81)	Учебник русского Яызка (26)	外国のロシア語 (23)	発音教程 (19)	ロシア民謡全集 (17)
5	中　国　語（656）	159	基礎漢語課本 (59)	ＬＬ中国語 (48)	北京語言学院口語材料 (26)	簡明基礎中国語 (25)	中文課程 (23)
6	イスパニア語（481）	365	Modern Spanish Third Edition (94)	Basic Spoken Spanish Part1 (31)	②Modern Spanish Second Edition (31)	Espanol en Directo (14)	NHKスペイン語入門 (9)
7	ド イ ツ 語（315）	596	Basic Spoken German (62)	The Modern Method: German (41)	Deutsch 2000 I (28)	Deutsch 2000 II (6)	Guten Tag Berlin! Phonetische Übungen (5)
8	ポルトガル語 ブラジル語（49）	302	Linguaphone Português Contemporâneo (269)	ＡＢＣからの実用ブラジル語会話 (12)	②Português：Falan Curso Intermediário (12)	ブラジル・ポルトガル語入門 (3)	
9	アラビア語（115）	229	Elementary Modern Standard Arabic (154)	Koran (14)	アラビア語入門 (11)	③Linguaphone Arabic (11)	Aradic Linguaphone Arabic Convsrsational Course (6)
10	音　楽　編（275）	159	中国音楽〈漢民族と蒙古族〉 (7)	北インドの伝統音楽（シタールとサロッド） (5)	キューバのヴィードウ音楽 Miss Santevia Rituales Atrocubanos (4)	③American Folk Songs (4)	③高砂族の歌 (4)
11	ペルシア語（171）	101	Iranian Music (19)	Qesse (18)	She'r (5)	③Namayesh (5)	③Conversa−phone's Round−The−World Persian (4)
12	西 洋 諸 語（195）	77	Linguaphone Suomen Kielen Kurssi（フィンランド語） (31)	スウェーデン語の入門Ｉ、II (8)	Linguaphone Cursus Nederlands（オランダ語） (4)	③Altio Finnish For Foreigners（フィンランド語） (5)	Linguaphone Norsk Kurs（ノルウェー語） (3)
13	イタリア語（161）	365	Automatismi di Grammatica Italiana Per Strainieri (29)	Lingua E Vita D'Italia (11)	Italiano Linguaphone Corso di Conversazione (7)	イタリア旅行会話 3時間 (5)	
14	朝　鮮　語（52）	71	標準韓国語 (23)	韓国旅行会話 3時間 (14)	朝鮮語の入門 (8)	例文活用韓国語 基本単語集 (6)	④韓国歌曲 (6)

	分類(各テープ総数)	総利用回数	1 (各利用回数)	2 (各利用回数)	3 (各利用回数)	4 (各利用回数)	5 (各利用回数)
15	タイ語 (24)	32	実用タイ語会語 (12)	タイ語の話し方 (7)			
16	東洋諸語 (52)	28	トルコ語教本 (11)	Turkish Basic Course (10)	Linguaphone Hebrew Course (5)		
17	ウルドゥー語 (72)	25	Spoken Urdū I.II (16)	ウルドゥー語入門 (5)	Kassette Kahani (4)		
18	デンマーク語 (79)	22	Linguaphone Dansk Kursus (6)	H.C.Andersen Eventyr (5)	デンマーク語の入門 (3)	Efter Endnu en Dag-Gasolin (2)	④Hurra Vf Ertil Fødsels Dag (2)
19	ヒンディー語 (16)	21	TAMIL (13)	Conversa-phone's Round-The-World Hindi (4)	Linguarecords No.1 (3)		
20	ベトナム語 (40)	18	Spoken Vietnamese (8)	FSI Basic Course Vietnamese (3)			
21	インドネシア語 (43)	17	World Language Series Indonesia (3)	海外旅行カセット インドネシア語 (2)	②Bunj Kata Kata Bahasa Indonesia (2)	②Album Sinta Nostalgia (2)	

(ヴィデオ)

1	英語 (96)	1930	ローマの休日 (66)	タクシー・ドライバー (64)	ある愛の詩 (60)	スティング (56)	マイ・フェア・レディ (53)
2	フランス語 (17)	153	ラ・ブーム (49)	太陽がいっぱい (28)	リラの門 (18)	モンパルナスの灯 (12)	男と女 (10)
3	日本語 (159)	72	野生の証明 (10)	スーパーマン(日本語) (6)	素顔の台湾 (5)	若草物語(日本語) (3)	④航空戦国時代 今、国際線で何が起こっているか(NHK特集) (3)
4	ヒンディー語 (33)	65	SILSILA (20)	KORA KAGAZ (6)	GANDHI(HINDI) (5)	QURBANI (4)	④SATYAM SHIVAM SUNDARAM(4)
5	イタリア語 (2)	24	続・青い体験 (20)	甘い生活 (4)			
6	中国語 (8)	24	桜 (11)	ふたごの兄第 (5)	未完の対局 (2)	③茶館 (2)	③皇天后土 (2)
7	ドイツ語 (2)	4	Uボート (3)	鉄路に消えた女 (1)			

（雑誌）

	雑誌名（各テープ総数）	総利用回数	1 （各利用回数）	2 （各利用回数）	3 （各利用回数）	4 （各利用回数）	5 （各利用回数）
1	English Journal (83)	420	'82、No.11 これだけはものにしたい、会話の基本フレーズ (35)	'83、No. 2 だれでも書ける通じる英語 (22)	'83、No. 7 これがサバイバル英語だ！ (19)	'83、No. 4 使える単語を飛躍的にのばす方法 (18)	④'83、No. 5 実用英語をマスターするための4つの技能別学習法 (18)
2	時事英語研究 (25)	312	'83、No. 7 楽しみながらできる英語学習 (24)	'83、No. 5 〈用途別〉辞書の使い方 (20)	'83、No. 6 現代ビジネスマンの常識	'83、No. 1 実用になる英語力 (17)	④'83、No. 2 〈会話形式〉英語による現代日本の紹介 (17)
3	Business View (36)	168	'82、No.10 日米ハイテク時代の競争と協調 (19)	'84、No. 2 いま何を思う？日系アメリカ人 (10)	'83、No. 2 素適なワンダーウーマンたち (9)	③'83、No. 5 空へ、宇宙へ、はばたく競争へ (9)	（別冊）「鉄」の説得力サッチャーを聴く (8)

②テープ利用比率（A）、利用指数（B）及び充実指数（C） '82.9月～'84.2月

（語学・音楽）

順位	語科名	利用比率（%）
1	英語	21.2
2	フランス語	16.6
3	日本語	16.4
4	ロシア語	6.6
5	中国語	5.4
6	スペイン語	5.2
7	ドイツ語	4.5
8	ブラジルポルトガル語	4.3
9	アラビア語	3.2
10	音楽編	2.2
11	ペルシア語	1.4
12	西洋諸語	1.1
13	朝鮮語	1.0
13	イタリア語	1.0
15	タイ語	0.5
16	東洋諸語	0.4
16	ウルドゥ語	0.4
18	ヒンディー語	0.3
18	デンマーク語	0.3
20	インドネシア語	0.2
20	ベトナム語	0.2

順位	語科名	利用指数
1	ブラジルポルトガル語	6.16
2	日本語	5.33
3	アラビア語	1.99
4	フランス語	1.64
5	ペルシア語	1.42
6	朝鮮語	1.37
7	タイ語	1.33
8	ヒンディー語	1.31
9	英語	1.06
10	ロシア語	1.03
11	スペイン語	0.76
12	中国語	0.58
12	音楽編	0.58
14	東洋諸語	0.54
15	ドイツ語	0.53
16	イタリア語	0.45
17	インドネシア語	0.41
18	ベトナム語	0.40
18	西洋諸語	0.40
20	ウルドゥ語	0.35
21	デンマーク語	0.28

順位	雑誌名	利用比率（%）
1	English Journal	46.7
2	時事英語研究	34.7
3	Business View	18.7

順位	雑誌名	利用指数
1	時事英語研究	9.00
2	English Journal	5.06
3	Business View	4.06

注）各分野の保有テープ数を(a)、各分野の総利用回数を(b)とすると、

(A)＝(b)／全テープの総利用回数×100

(B)＝(b) ／ (a)

(C)＝(a)／各語科学生数

（ヴィデオ）

順位	語科名	利用比率(%)
1	英語	84.9
2	フランス語	6.7
3	日本語	3.2
4	ヒンディー語	2.9
5	イタリア語	1.6
6	中国語	1.6
7	ドイツ語	0.2

順位	語科名	利用指数
1	英語	20.10
2	イタリア語	12.00
3	フランス語	9.00
4	中国語	3.00
5	ドイツ語	2.00
6	ヒンディー語	1.96
7	日本語	0.45

（言語・音楽）

順位	語科名	テープ充実指数
1	ペルシア語	2.85
2	ドイツ語	2.84
3	フランス語	2.46
4	中国語	1.87
5	スペイン語	1.37
6	イタリア語	1.34
7	デンマーク語	1.32
8	ロシア語	1.30
9	朝鮮語	0.87
10	アラビア語	0.82
11	タイ・ベトナム語	0.64
12	インド パキスタン語	0.63
13	ポルトガル ブラジル語	0.61
14	インドネシア語	0.54

※英語科、モンゴル語、ビルマ語留学生別科を除く。

〈出版物案内〉

1983年12月以後に出版された、語学テキスト（スライド、ビデオテープor録音テープ付）、目録、論集等は以下の通りです。これらの出版物は「大学教育方法改善」「視聴覚教材開発」等のプロジェクトによるものです。

スライド目録ーロンドンと詩人達ー　　大橋　克洋編著

編集後記

◇　ＡＶジャーナル第５号をお届けします。今号では1982年９月から1984年２月までの１年半のテープライブラリーの利用者統計を掲載しました。利用比率は英語、フランス語、日本語、ロシア語が圧倒的に高く、特に留学生の利用が目立っています。さらにビデオの利用が非常に多くなってきていることも大きな特徴です。

◇　今年度の特別設備費は、スタジオ充実計画の３年度目にあたり、カメラ、スイッチャー等も設置され、スタジオ機能は、ほぼ万全といってもよく、今後の利用が期待されます。

◇　さらに今年度内に５階・第４ＬＬ教室が新設されます。視聴覚教育委員会での計画案も出来、今後のＬＬ教育を先導するユニークなＬＬ教室が出来ます。

◇　今年卒業する池田瑞穂、今井己知子、村田玲子、中井美保子さんには一年間ＬＬの仕事を手伝って頂きました。感謝しています。

◇　次号の発行は６月を予定しています。多くの方方の寄稿、ご意見をおよせ下さい。

ＡＶ　Journal　―第５号―

1984年３月26日発行

編　集　大阪外国語大学視聴覚教育委員会
附属図書館視聴覚資料係
発　行　大阪外国語大学
印　刷　㈱ムラタ印刷